動物園学と駅弁学

― 学際的視点の面白さと重要性 ―

湧　口　清　隆

１．はじめに

「動物園学」「駅弁学」と書いても、「そのような学問は聞いたことがない」「そもそも趣味の延長上ではないか」と訝る向きが多いであろう。実際、国立情報学研究所のCiNii Researchを用いてこれらの用語を検索すると、後述するようにこれらをタイトルに含む書籍は「動物園学」で４件、「駅弁学」で１件、雑誌は「動物園学」で１件、「駅弁学」で０件である。雑誌記事としても「動物園学」で数本を数えるのみである。

わが国では、動物園（上野の国立博物館の付属施設として1882年に誕生）も駅弁（定説では宇都宮駅白木屋の握り飯として1885年に誕生）も明治時代から140年以上脈々と続いているにもかかわらず、どちらも学問の対象とはされてこなかった。ともに半世紀以上にわたりレクリエーションやレジャーの対象として意識され、消費されてきた。しかし、外部環境の変化に伴い、そのあり方が大きく問われることになった今日、果たしてその存否や役割についてしっかりとした議論ができるのであろうか。ようやく近年、学際的な学問として検討しようという流れが見え始めた。

動物園学に関しては、10年来の構想や議論を経て、2026年に動物園学会が創設される見込みである（４月25日に設立総会を予定）。駅弁に関しては、広島駅弁当株式会社が2024年度に提案した「郷土料理伝承に不可欠な駅弁の調査研究・価値再構築事業（広島をモデルとした駅弁ストーリーの創出）」が文化庁「食文化ストーリー」創出・発信モデル事業に採択され、2025年度の活動はJR西日本の「～郷土料理を伝承する日本固有の食文化～「駅弁」の調査研究・価値再構築事業」に引き継がれた（2026年３月15日に京都鉄道博物館で報告会を実施予定）。今後、駅弁をわが国固有の食文化、鉄道文化として登録無形文化財化する動きが視野に入ってきた[1]。

本稿では、私自身がかかわっている「動物園学」「駅弁学」の学際的研究の面白さや重要性、課題などについて論じるとともに、学問的な発展性について検討したい。

２.「動物園」「駅弁」の定義

「動物園」「駅弁」、多くの市民は「何となくこのようなものだ」というイメージを持っていると思われるが、実は明確な定義がない点が特徴である。広辞苑（第７版）によれば、それぞれ「各種の動物を集め飼育して一般の観覧に供する施設。」「『駅売り弁当』の略。鉄道駅で乗客に売る弁当。」と定義されている。この定義は一見すると的を射ているように見えるが、ペットショップと動物園との違いは明確ではないし、例えば北海道森駅のいかめし阿部商店の「いかめし」のように駅ではほとんど販売されていないけれども百貨店やスーパーなどのイベント販売では著名という駅弁も存在する。

実は、動物園も駅弁も名称独占ではないため、誰でも名乗ることができ、それ以外の名称でも実質的に動物園、駅弁となっているものも存在する。例えば、「天才！志村どうぶつ園」という日本テレビ放送網で放送された番組があったが、「志村どうぶつ園」という施設が存在した訳ではない。広島駅には「むすび　むさし」という広島市内に数店舗を展開する弁当店があり、多くの広島市民は駅弁屋だと認識している[2]。「井の頭動物園」と呼ぶ人も多い井の頭恩賜公園にある動物園は「井の頭自然文化園」が正式名称で、魚類の展示もある。

しばしば、公益社団法人日本動物園水族館協会（以下「JAZA」記載、2026年１月現在、国内の動物園91園、水族館49館が正会員として加盟）[3]、一般社団法人日本鉄道構内営業中央会（以下「中央会」と記載、2025年８月現在、会員数82社）に加盟する組織がそれぞれ動物園、駅弁屋として認知されるという考え方もあるが[4] [5]、例えば、新江ノ島水族館や、「車窓食堂」ブランドで駅弁を展開するJR東海リテイリング・プラスはJAZAや中央会に属していない。

以上のように、動物園、駅弁、どちらも定義が明確化されていないことが、学問や

---

[1] 駅弁の調査に関する概要は湧口［2026］p.58を参照。

[2] 広島駅弁当株式会社［2025］p.48。

[3] JAZAのウェブページによる（https://www.jaza.jp/about-jaza/structure、2026年１月26日閲覧）。

[4] 中央会のウェブページによる（http://www.ekiben.or.jp/main/about/meibo.html、2026年１月26日閲覧）。

[5] 石田［2010］p.1はJAZA加盟の動物園を「公認された動物園」とみなしている。

保全の対象とすることを難しくしており、これまで研究の対象となりにくかったと言えるのではないだろうか。その意味で、研究対象としていくためには、研究者、実務者を交えた研究対象の明確な定義づけが必要であろう。そのためには、動物園、駅弁の役割や目的、歴史的経緯をしっかりと確認する必要がある。

3.「動物園」「駅弁」にかかわる人々

動物園や駅弁にかかわる人々は研究者だけではない。実務者も消費者も支援者（ファン）も、これらを管轄する行政や組織など多岐にわたっている。さまざまな立場から動物園や駅弁にかかわる人々がいるなかで、その一部を組織化するだけでは学術的な研究は成立しない一方、支援者（ファン）に対しても学術的な見方を強制することも適切ではないだろう。この点が学会設立や学問分野としての独立を困難にし、既に確立した学問体系の中でその派生的分野としての研究を余儀なくされていた側面がある。

例えば、湧口［2016］は『公益事業研究』誌の中で動物園・水族館の制度問題と経済的評価について論じたが、動物園を「公益事業」に位置付けることにかなりの紙面を割くことになった。一方で、鉄道事業者の関連事業の一つとしての動物園・水族館の研究は公益事業学会においても日本交通学会においても十分に認められる研究テーマである。湧口［2024a］は同じく『公益事業研究』誌の中で駅弁について論じたが、公益事業学会の中で既に確立した分野となっている廃棄物問題の観点に立って、2000年代初めの冷凍弁当開発が市場の支持を得られなかった半面、コロナ禍の中で冷凍弁当が大きな支持を集めたという事実から、駅弁にアプローチした。

同様のことは獣医学分野でも見られたようである。村田［2015］は日本野生動物医学会設立の際に動物園獣医師と大学研究者との間に見解の違いがあったこと（p.35）を回想しているほか、動物園の獣医師として「野生動物はその教育プログラムの中で、いつも主要対象動物として扱われて来なかった」（p.38）として、畜産学や獣医学の教育上の限界を指摘している。また、村田［2019］は、「ヨーロッパ発祥の動物園では、動物学や動物学的な要素が歴史的に重視されてきた。…（中略）…死体解剖時に各種臓器や骨格を残し研究に活かす努力が十分になされて」（p.44）きたが、国内動物園では「死因解明（病性鑑定）のために臓器を切り刻み、ホルマリン液に浸漬することが動物園獣医師の通常業務として行われて」（p.44）おり、研究という視点の欠如を指摘している。

動物園の場合、動物園の運営にあたる飼育員などの職員、獣医師、公立動物園の場

合には行政機関から、民営動物園の場合には親会社から派遣される管理者という目的や役割が異なる職員が鼎立しているほか、来場者や支援者（ファン、個人、企業）、メディア、地域社会、大学等の動物研究者など、ニーズや利害が異なる人々が取り巻いている。同様のことは、駅弁にも言え、地域に根差した経営者、鉄道会社から派遣された経営者、駅弁事業者を管理する鉄道当局のほか、従業員、移動中に派生需要として駅弁を購入する消費者、駅弁大会などで本源需要として駅弁を購入する消費者、支援者（ファン）、メディア、地域社会などがかかわっている。それぞれのアクターの関心も利害も異なっている。それ故、動物園、駅弁事業者内部から研究を行おうとする誘因も弱かったし、仮に研究を行うとしても、それぞれのアクターの視点にアプローチや分析が偏ってしまい、大所高所からの研究が行われにくい環境にあったと言えよう。

４．動物園学の誕生

「動物園学」（Zoo Science）という言葉が、わが国で初めて書籍のタイトルに現われるのは、中川志郎上野動物園元園長が1975年に著わした『動物園学ことはじめ』（中川［1975］）である。そこでは動物園学を「ヒトと動物の調和をめざす総合科学」と定義し、「関係ある科学を有機的に結び付け、連関させることにより作り上げられる新しい学問体系」と、村田［2014］はまとめている（p.2）。

村田［2014］はこれを受け、自然科学領域を「体系づける部門としては、動物園動物を動物学的に研究するとともに科学的に飼育するための飼養管理部門、繁殖部門、栄養部門、生理部門、生態部門、行動部門、比較形態部門、獣医部門、保全生物部門等」を、社会科学および人文科学領域を「体系づける部門としては、動物園を文化的存在として研究するとともに都市装置の一部としてその存立基盤を明確にするために、歴史部門、展示部門、環境教育部門、福祉部門、法律部門、経営部門等」を挙げ、学際的アプローチの必要性を説いた（p.3）。

村田浩一よこはま動物園ズーラシア園長・日本大学生物資源科学部元教授は、村田［2014］を含む動物園関係者で執筆した『動物園学入門』（村田・成島・原［2014］）の出版に先立ち、英国で出版された『Zoo Animals: Behaviour, Management and Welfare』というタイトルの書籍を『動物園学』（村田・楠田監訳［2011］）として刊行した。この時差を考慮すると、この翻訳書の刊行は、わが国に比べてはるかに先行する欧米の動物園学の現状を見せることにより、わが国の動物園関係者を奮起させる効果を狙ったのではないかと勘繰る。

一方、井の頭自然文化園園長などを歴任した文系出身の石田戢帝京科学大学元教授はほぼ同じ頃『日本の動物園』（石田［2010］）を著わし、動物園学的なアプローチに基づき、動物園の歴史や役割、運営を分析した。石田戢教授は一時中断したものの1995年から動物園研究会を主宰し、動物園関係者の研究・交流の場を創設した。帝京科学大学で石田教授の後任となった佐渡友陽一准教授は、物理・化学系基礎化学の出身でありながら、上野動物園で実習を行い、静岡市立日本平動物園で勤務し、静岡市の行政職員を務めた経験を活かして、歴史や経営の視点から動物園を分析し（佐渡友［2022］）、動物と人間の関係を考察した（佐渡友［2025］）。このようにして中川志郎元園長がめざした動物園学のイメージに接近してきた。

かくして、村田［2019］は「動物園学とは、単一の学問ではなく、ヒトと人間と環境の調和を目指した総合科学的もしくは学際的な学問領域であり、関係する学問分野を有機的に結び付け連携させることによって構築可能な新しい学問体系である」（p.45）と定義した。そのうえで動物園学と動物園との関係を「氷山モデル」で示した（p.46、図７）。「動物園で来園者が直接的に見ることができるのは、水面上に現れた10分の１であり、残りの10分の９の飼育技術や環境教育や生物多様性保全に関わる仕事は水面下に存在しているため簡単に知ることはできない。だが、その水面下にある部分こそが動物園の基盤であり、動物園学（Zoo Science）によって成り立つものである」と述べている。この氷山全体に浮力を与えるものとして来園者、zooサポーター、社会的責任を担った企業、国際教育を挙げ、動物園が水面下で行うこととして地域貢献を示している。

湧口［2016］は、瀧端［2014］をもとにわが国の行政法上、動物園が博物館（社会教育施設）ではなく都市公園に位置づけられることを述べたうえで、費用便益分析による便益計測上の課題を論じてきたが、水面上の氷山はまさに旅行費用法で計測されるレクリエーション上の価値であり、水面下の氷山は「見えない」が故にCVM（仮想市場法）によっても計測されない価値と言えよう。動物園学の誕生により、ようやく氷山全体を占める動物園の価値が計測可能となり、社会的認知が得られるのではないかと思う。もちろん、いま「計測されない」と述べたが、浮力の大きさは、個人・企業のzooサポーターからの金銭的・非金銭的寄付やボランティア活動によって間接的に測ることはできよう。佐渡友・原澤［2024］が分析してきたサポーター資金の大きさや、湧口［2024b］が提案してきた地域企業との展示協力に関する提案はこの文脈の中で位置づけられよう。

このほか、動物園学をタイトルとする書籍は『動物園のつくり方：入門動物園学』

（武田ほか訳［2016］）、2024年から刊行された年報『ZSH動物園学紀要』が存在する。後者は、茨城大学と日立市かみね動物園、千葉市動物公園が連携して発行する研究誌（年報）である。村田［2019］は動物園と大学や研究機関との連携について、「動物園における学術研究が大学や教育機関と連携することで大きな成果が得られるが、動物園が自ら研究能力を高めることがなければ一方的に利用されるだけに終わる可能性がある」（pp.44-45、図６）と指摘する。『ZSH動物園学紀要』の創刊にあたり、小針［2024］は、「動物の飼育管理に関わる研究だけでなく、展示手法や動物園を使った実践的教育など、地域の動物園と地方大学双方の学びの機能を向上させる様々な共同研究活動を展開」するなかで、「動物園における独創的な技術的工夫や貴重な教育活動など…（中略）…の情報は、個々の職人的技術として徒弟制的に口頭伝承されるのみであったり、担当者の移動や退職に伴い、引き継がれず消失してしまうことも少なくない」（p.i）という課題解決のために、従来の学術誌では採択されない事例報告なども掲載できる紀要を創刊したことを明らかにしている。この試みは動物園学を地域レベルで発展させる一助となろう。



写真：美ら海水族館
2025年12月　筆者撮影
研究成果の発表に積極的な水族館、動物園も増えてきた

５．駅弁学誕生をめざして

さて、駅弁に目を転じたい。「駅弁学」というタイトルの書籍は、2000年に刊行された『駅弁学講座』（林･小林［2000］）のみである。ただし、この書籍では「駅弁」「駅

弁学」の明確な定義はなされていない。駅弁については「鉄道のお上の伝統的な考え方では、『駅弁とは米飯を主とし、これに数種のおかずを添えてひとつの容器におさめたものをいう』ということになっている」(pp.24-25) と紹介されているのみである。「駅弁学」と銘打ったのは、おそらく多くの駅弁本に見られる各駅の駅弁紹介、すなわちその駅弁の中身や掛け紙、由来の紹介だけではなく、多様な視点、すなわち弁当の歴史、駅弁の歴史、駅弁の特徴、色彩、販売方法（駅弁売りの制服やアナウンス、販売箇所)、駅弁のラベルや容器、付属物（箸、手拭き、バラン)、茶器、屋号、メディアとの関係など、幅広い観点からさまざまな駅弁を横断的に分析しているからであろう。

この本の著者の一人である林順信氏は雪廼舎閑人のペンネームで『汽車辨文化史』(雪廼舎閑人［1978］) を著わしており、『駅弁学講座』は『汽車辨文化史』をベースにその当時の最新動向を加えたものとなっている。したがって、「駅弁学」と言っても内容的にはまだ文化史的視点にとどまっている。

一方、大学研究者の論文、書籍としては、小田きく子（山崎きく子）昭和女子大学教授が昭和40（1965）年代から家政学（食物学、栄養学、調理学）的視点から分析した論文が10本以上存在する。「昭和40年（1965年）本学学生の３年次の夏、卒業論文に『駅売弁当について』のテーマで、21日間の日本一周鉄道の旅をして、全国の駅弁178個を購入し、その食品の使用頻度・栄養価・調理法・郷土料理との関係について調査したのが始まりである」(小田［2005］p.15)。1970年頃から『學苑』誌に研究成果を発表している。

以上のような状況を踏まえると、「駅弁学」と称しても、従来の研究は人文科学系と自然科学系に分断されていた。それに対し、広島駅弁当株式会社［2025］や現在進行中のJR西日本の研究では、人文、社会、自然の３分野にわたり、鉄道史、食文化、文学、経済学、経営学、鉄道技術、調理学などの研究者が一堂に会し、一つの事象を多面的に議論するのみならず、事業者代表を交えた研究体制となっている。2025年度のJR西日本の研究では、全国レベルの戦略会議と地域レベルの会議が並行して進められ、2025年３月までJR西日本から広島駅弁当株式会社に出向していた奥山喜文氏(2025年から西日本旅客鉄道株式会社コーポレートコミュニケーション部鉄道文化推進室 担当課長）を中心に、東四柳祥子梅花女子大学食文化学部教授、杉山寿美県立広島大学地域創生学部教授、堤一郎サレジオ工業高等専門学校客員教授、松橋信広一般社団法人日本鉄道構内営業中央会事務局長、私が参加する形となっている。その結果、ようやく学際的な研究が実現するに至った。

昭和40（1965）年頃まで駅弁は停車中の列車の窓からホーム立売りの販売員から購入するという形態が一般的であった。そのため、駅弁の販売量・額は鉄道の総延長やダイヤ（停車時間や乗換え有無、列車の運行時間・時間帯など）に大きく影響された。また、車両の構造（区分室か開放室か、貫通路を通って走行中にトイレに行けるか、機関車の牽引力による食堂車連結の有無など）も駅弁の需要に大きな影響を与えた。販売駅の数や鉄道当局による価格規制や品質規制なども駅弁の内容を左右する。さらに駅弁の内容（食材）や調理法は鉄道当局による食品衛生管理に加え、当初は食材が地産地消であったため、販売駅付近の農林水産業や郷土料理の影響を大きく受けた（湧口［2026］）。

もう一点忘れてはならないのは事業者の存在である。例えば、「峠の釜めし」で著名な群馬県横川駅の荻野屋で釜めしを考案した高見澤みねじ４代目社長は大妻女子大学の前身学校の出身で、家政学を学んでいる。事業者（創業家一族）自体が食物学やデザイン学、経営学などを学び、その知識を日々の営業の中で実践しているケースも多いと考えられる。

さらに駅弁研究で鍵となるのは掛け紙の存在である。個性的な掛け紙が多かったことからコレクターが少なからず存在する。駅弁事業者は業務上、大きな駅の駅前に位置していたから、戦災や大火などの被害を受け、古い資料を失っていることが多い。そのため、コレクターが収集した掛け紙が見つかることにより、かつて販売していた駅弁が見つかるということも多い。また、駅弁は明治時代から文学作品や新聞、雑誌の記事に数多く登場してきた。これらの資料から駅弁の新たな歴史や内容物、調理上の工夫などがわかることもある。

その結果、研究者、実務者、消費者も含む学際的な研究の場が生まれることで、駅弁に関する文化的価値を再発見できることが期待される。

６．おわりに

本稿では、「動物園学」「駅弁学」の学際的研究の面白さや重要性、課題などについて論じるとともに、学問的な発展の期待について述べてきた。２つのテーマは一見すると別個のように見えるが、動物園、駅弁それぞれの歴史をたどると、明治時代に欧米から教育研究や鉄道の技術を導入した際のわが国独自の解釈や制度設計上の課題が見えてくる。紙面と時間の関係で本稿では取り扱わないが、欧米の階級文化とかかわりがある。動物園も駅弁も欧米の階級文化に根差した考え方を持ち込まなかったことや、国家的統制下で市場競争が繰り広げられた結果、逆にレクリエーションを中心と

するわが国の動物園、皇室から庶民まで楽しむことができる駅弁という文化が生まれたと確信している。この点は改めて研究を重ねたい。

本稿が、動物園学、駅弁学という如何にも趣味の延長上にある研究が、明治以降150年に及ぶ動物園、駅弁に関する課題解決の一助となっていることをPRできていれば、当事者として大変嬉しく思う。

参考資料

石田戢［2010］:『日本の動物園』、東京大学出版会。

小田きく子［2005］:「駅売弁当の変遷」『學苑』778、pp.15-28。

小針大助［2024］:「茨城大学・日立市かみね動物園・千葉市動物公園の３機関連携紀要 ZOO SCIENCE JOURNAL（ZSH動物園学紀要）の創刊について」『ZOO SCIENCE JOURNAL（ZSH動物園学紀要）』1、p.i。

佐渡友陽一［2022］:『動物園を考える：日本と世界の違いを超えて』、東京大学出版会。

佐渡友陽一［2025］:『動物と人間の関係を考える：日本人と動物のビッグヒストリー』、東京大学出版会。

佐渡友陽一・原澤恵太［2024］:「動物園水族館におけるファンドレイジングの展開と課題：コロナ禍によるクラウドファンディングの広がりを踏まえて」『日本ミュージアム・マネージメント学会研究紀要』第28号、pp. 29-40。

雪廼舎閑人［1978］:『汽車辨文化史』、信濃路。

瀧端真理子［2014］:「日本の動物園・水族館は博物館ではないのか？―博物館法制定時までの議論を中心に―」、『追手門学院大学心理学部紀要』第８巻、pp.33-51。

武田庄平・鈴木馨・上野吉一・竹村勇司訳［2016］『動物園のつくり方：入門動物園学』、;農林統計出版。【原著】Paul A. Rees［2011］:*An Introduction to Zoo Biology and Management*、Wiley-Blackwell。

中川志郎［1975］:『動物園学ことはじめ』、玉川大学出版部。

林順信・小林しのぶ［2000］:『駅弁学講座』、集英社新書。

広島駅弁当株式会社［2025］:「郷土料理伝承に不可欠な駅弁の調査研究・価値再構築事業（広島をモデルとした駅弁ストーリーの創出）調査報告書」、文化庁。

村田浩一［2014］:「序論－動物園学とは」、村田浩一・成島悦雄・原久美子［2014］:『動物園学入門』、朝倉書店、第１章。

村田浩一［2015］:「動物園の科学」『日本野生動物医学会誌』20（2）、pp.35-40。

村田浩一［2019］:「動物園の歴史的背景としての学術研究 ～極東の片隅で何を継承し，何を興し，そして何を発信すべきか？～」『日本野生動物医学会誌』24（2）、pp.41-47。

村田浩一・楠田哲士監訳［2011］:『動物園学』、文永堂出版。【原著】Geoff Hosey, Vicky Melfi, Sheila Pankhurst［2009］:*Zoo animals : behaviour, management, and welfare*、Oxford University Press。

村田浩一・成島悦雄・原久美子［2014］:『動物園学入門』、朝倉書店。

湧口清隆［2016］:「査読付現況報告 動物園・水族館の制度問題と経済的評価における課題」『公益事業研究』68 (2)、pp.45-52。
湧口清隆［2024a］:「食品ロス削減に向けたチルド弁当の可能性」『公益事業研究』75 (2)、pp.1-9。
湧口清隆［2024b］:「展示を通じた動物園、水族館の地域産業界からの連携・支援獲得の可能性に関する一考察」『社会起業研究』4、pp.63-71。
湧口清隆［2026］:「駅弁の中の魚」『運輸と経済』86 (2)、pp.58-61。